レジーナ・カルマ

大正の末期、人里離れた深い森の中に建つその洋館には、美しさと高い知性で周囲を圧倒した一人の女性、舞夜が暮らしていた。彼女は、心理の研究に没頭し、館はいつしか奇妙な噂を集める場所となっていた。村の男たちは彼女の美貌に狂い、女たちはその異質な才気を恐れた。嵐がすべてを飲み込むような夜、村の者たちは恐怖と嫉妬に駆られ、暴徒と化して舞夜の館へと押し寄せた。重厚な扉を打ち破り、土足で広間へ踏み込む者たちの中心で、舞夜は、暖炉の炎に照らされながら冷ややかに微笑んでいた。

舞夜：「わたしを滅したとしてもわたしの魂は滅びません。いつかわたしを理解し、共感する者が現れ、わたしは、その者と共に歩むために復活するでしょう…」

激しい怒号と混乱が広間を支配する中、舞夜は、無念のまま命を落とすこととなった…

嵐の前夜一人里離れた森の洋館。大正末期に謀殺されたという舞夜の呪いを調査するため、大学のオカルトサークルのメンバー4 人は、嵐が近づく山道を登っていた。

大河：「館が見えてきたぞ！もうすぐだ！！嵐が本格化する前に館に入るんだ！いいな！遅れるなよ、陽花里、理人、琴葉！！」

人並外れた行動力と明るさでサークルを引っ張るサークルリーダー。体育会系の明朗快活さで周囲から信頼を得て安心させるが、自信家で豪快な性格は、ときに「他人の繊細な変化を見落とす」という脆さも含んでいる。この調査を成功させ、サークルの実績にすると共に仲間との結束を強めようと奮闘する。

陽花里：「も〜〜、大河ってばマジで強引すぎよ！あたしの靴、もうドロドロなんだけど！少しはあたしたちに合わせてよね！」

派手で露出の多い服装と奔放な口調がトレードマークの垢抜けた現代っ子。大河の恋人であり、彼のまっすぐな男らしさに惹かれて、後ろをぴったりと歩いている。一見すると軽薄に見えるが、非常に一途。自分とは正反対の性格の理人を認め、少し気弱な琴葉のことを気に掛けるなど周りもよく見ている。

理人：「大河、そんなに焦っては却って危険だ。足元を見てみるんだ…陽花里の言う通り、もう少しペースを落として進もう。」

どんな状況においても、俯瞰して物事を見る冷静さを持ち、淡々とロジックを組み立てる理知的な青年。内気で目立たないが、サークルのブレーンとして、いざというときは、大河の暴走を止め、みんなをまとめあげる役割を担っている。冷静な分析の一方で、仲間への気遣いを忘れない優しさも秘めている。

琴葉：（…どうしよう……わたし…もう足が動かなくなってきてる…みんなについて行けるかな……「あ…理人くん、待って…」

人見知りで、いつも他人の後ろに隠れてしまうような控えめな少女。オカルトにさほど興味がなかったが、密かに想いを寄せる理人の傍にいたかった。大河や陽花里の眩しさに気圧されながらも、理人が時折見せる優しい視線に、胸の奥で甘い焦がれを抱いている。表には出さないが、とても愛情深く純粋である。

第０話：洋館への誘い

理人：「琴葉さん、足元が滑るから僕の手を掴むといい。」

琴葉：「えっ…あ、ありがとう、理人くん…」

　理人が差し出した男らしい手を、琴葉は、顔を赤らめながら、壊れ物を扱うようにそっと握りしめた。琴葉にとって、理人の手のひらの大きさと温かさは、この世界で最も安心できるものだった。その様子を後ろから見ていた陽花里が、大河の腕に抱きつく。

陽花里：「おっ、お熱いじゃん？」

大河：「ははは！理人も隅に置けないな！」

　と豪快に笑い飛ばした。頼れるリーダーと、彼を愛する恋人。思慮深い青年と、彼を密かに想い続ける少女。４人の間には、それぞれに完成された「男と女」の美しい関係性と、ささやかな恋心が確かに存在していた。しかし、洋館の重厚な扉を開けたとき、４人はこれから起こる出来事を想像することすらできなかった…

　――ゴォォォォ……ッ！

　叩きつけるような大河雨と猛烈な突風が、人里離れた洋館の重厚な窓ガラスを激しく打ち鳴らしていた。広間の古びた暖炉の前、赤々と爆ぜる炎の明かりだけが、身を寄せ合う４人の男女の影を不気味に壁へと引き伸ばしている。彼らはこの館に眠るとされる、100年前の凄惨な怪奇事件―を調査しに来たオカルトサークルのメンバーだった。しかし、現在の状況は調査どころではなかった。

陽花里：「ねえ、本当に帰れないの…？スマホもさっきから完全に圏外だし、電波が一本も立たないんだけど！」

　長いネイルの指先でスマートフォンの画面を何度も叩きながら、不安そうに声を荒らげたのは陽花里だった。自由奔放で普段は派手なギャルである彼女も、トレードマークの笑顔を完全に失い、引きつった表情で暗い天井を見上げている。

大河：「落ち着けって、陽花里。さっき見ただろ、麓へ続く唯一の一本道が土砂崩れで完全に塞がっちまってるんだ。夜が明けて嵐が去るまでは、ここで耐えるしかない。」

　大河は、自分自身に言い聞かせるように力強く答えた。普段なら頼りになるその逞しい声音も、心なしか強張っており、暖炉の炎を見つめる瞳が焦燥に揺れている。その二人のやり取りの横で、内気で冷静な青年、理人は、館の壁に掛けられた埃っぽい古文書をじっと見つめていた。その袖口を、隣に立つ少女が小さく震える手で掴んでいる。彼女は、理人の影に隠れるようにして、恐怖を堪えるように俯き、小さく唇を噛み締めていた。大人しくて繊細な二人にとって、この異様な密室の空気は、息をすることさえ苦しかった。その時、前触れもなく、暖炉の炎が凍りつくような不気味な「青色」へと変色した。

第１話：望まぬ宴

その瞬間、広間の温度が急激に低下し、骨を凍らせるような猛烈な冷気が吹き抜けた。４人の口から、真っ白な息が同時に漏れ出す。

「…うふふ！待っていたわよ、哀れな子羊たち…」

空間が歪み、天井付近の闇から悍ましい影が染み出すように現れた。長い黒髪を生き物のようにうねらせ、血のように赤い瞳をした絶世の美女。いや、それはカラダを持たない怨霊―魔女「舞夜の幽霊」だった。

舞夜：「我が領域へようこそ。君たちに極上の娯楽を授けてあげるわ💕」

舞夜の冷徹で妖艶な声が、脳髄へ直接突き刺さるように響き渡る。４人は、恐怖で指一本動かせず、その場に縫い付けられていた。

舞夜：「ゲームのルールは単純よ。①異性のおしりを肉体の手が触って感じさせることで、そのカラダに乗り移ることができる。乗り移られた方は自動的にカラダから押し出される。②フリーの魂は、異性のカラダへと憑依するか選ぶことができる…ただし、③1つのカラダに魂は１つだけ、そして、④正体がバレたらその時点でその魂が消滅するわ。」

大河：「何を言っているんだ！そんなゲームをする訳がないだろう！」

陽花里：「そうよ！何のメリットがあるっていうの？」

２人は、魔女の誘いを一蹴して言い放った。

舞夜：「うふふ…異性のカラダに興味はない？愛する者同士は、相手と一つになりたい…そして相手を想う者は、相手のことをもっと知りたい…そんな願いが叶うのよ。」

２人は、お互いに顔を見合わせ、唾を飲んだ…

琴葉：「でも…バレたら魂が消滅って死ぬってことですよね…」

少しだけ舞夜の話に興味を持っているような琴葉に理人が釘を刺した。

舞夜：「⑤最終的にそのカラダに定住することを選べば、バレても魂は消滅しないわ。」

理人：「琴葉さん、耳を貸しちゃダメだ！こんな怪しい話…何を企んでいるんだ？」

舞夜：「わたしは、カラダが欲しいの。自由に使えるカラダをね。」

陽花里：「あたしと…琴葉のどちらかのカラダに憑依したいってこと？」

舞夜：「別に…カラダは女じゃなくってもよくってよ💕」

舞夜は、舐めるように理人と大河を見つめた。その視線に２人は、身を震わせた。

舞夜：「⑥カラダを気に入ったなら、おしりに最高の快感を与えることで、器を完全に奪い去ることができる。もちろん、わたしも参加するわ。」

第２話：最初の悲鳴

狂気的な高笑いが広間に木霊した。と同時に、バチン、バチンと館の照明が一斉に弾け飛び、世界は一瞬にして、己の手元さえ見えない完全な「漆黒の闇」へと突き落とされた。誰かの短い悲鳴。直後、衣服が激しく擦れ合う不穏な衣擦れの音と、誰のものかもわからない、濡れた艶めかしい「吐息」が、冷え切った闇の中に静かに響き渡った―。

視界が完全に奪われた闇は、人間の五感を狂わせる。照明が一斉に弾け飛んだ直後の広間は、静寂と呼ぶにはあまりに生々しく、湿り気を帯びた音に満たされていた。

「おい、みんな動くな！　誰がどこにいるか分かんないぞ！」

大河の野太い怒鳴り声が闇を引き裂いた。しかし、その声すらも、どこか足元が浮ついているような酷い動揺を孕んでいる。

直後、ドサリと何かが激しく擦れる音と、床を蹴るような不穏な足音が響いた。

「いやっ、来ないで……！」

恐怖に震える琴葉の声が聞こえた、まさにその瞬間だった。

「ひゃあッ…ん、あぁッ…！？」

暗闇の奥で肉感を帯びた短い悲鳴が弾けた。それは悲鳴というよりは、背後から突然、無防備な場所を襲われた驚愕と―脳髄を直接灼くような快感に満ちた喘ぎだった。衣服越しに容赦なく、深く、手のひらの質量が肉を掴み、指先が這い回るような湿った衣擦れの音が響く。続いて、息を飲むような、艶めかしく濡れた吐息が静かに闇へ溶けていった。

――バチ、バチバチバチッ！

不意に、館の奥で古い自家発電機が悲鳴を上げるように作動した。壁のブラケットライトが弱々しく明滅を繰り返し、やがて禍々しい橙色の光で広間を照らし出した。

大河：「ふぅ…あ、驚いた。本当に停電だったな…」

最初に声を上げたのは大河だった。彼は額に浮かんだ大量の汗を拭いながら、いつものように豪快な仕草で肩をすくめてみせる。だが、その瞳の奥には、先ほどまでの焦燥とは違う、冷酷で妖艶な光が不気味に宿っていた。

４人の立ち位置は、暗転前とは僅かに、しかし決定的に変わっている。理人は、暖炉のすぐ傍で腕を組み、張り詰めた表情で部屋の四隅を観察していた。陽花里は、派手な爪を噛みながら、狂おしいほどに周囲を警戒している。そして琴葉は―おしりを愛おしそうに包み込むように、自らのスカートの後ろを両手で力強く押さえたまま、顔を林檎のように真っ赤に染めてガタガタと震えていた。

第３話：疑惑の連鎖

陽花里：「今の悲鳴、誰…？」

陽花里が掠れた声で全員を見回す。

理人：「僕じゃない…琴葉さん、大丈夫かい？」

理人がいつも通り冷静に問いかけるが、琴葉はただ首を激しく横に振るだけで、一言も喋ろうとしない。その瞳には、底知れぬ恐怖が浮かんでいた。

明かりが戻った広間にいたのは、外見こそ「いつもの４人」だが、その中身は本人かどうか疑わしい。弱々しく灯るブラケットライトの下、広間の空気は肌を刺すほどに張り詰めていた。誰かがすでに偽物を前提とした、引き返せない心理戦が静かに幕を開ける。

陽花里：「あー、びっくりした！でも、とりあえず明かりが戻ってよかったじゃん？」

陽花里がいつものギャル風の口調で胸をなでおろした。しかし、その手つきはどこかぎこちなく、派手な長い爪が自身のジーンズの腿をきつく引っ掻いている。

理人：「…本当にそう思っているのかい？」

理人が鋭い視線を陽花里に向けた。

理人：「魔女の言葉が本当なら、僕たちの中身が既に入れ替わっている可能性がある。入れ替わってなかったとしても…陽花里が僕か大河のどちらかを狙ってる可能性だって…」

陽花里：「はぁ！？ 何言っちゃってんの、理人。あたしがそんな破廉恥なことするわけないじゃん！冗談じゃないわよ！」

陽花里は、声を荒らげるが、その怒り方はどこか過剰な演技実感を伴っていた。その様子を大河は暖炉のそばに立ち、ニヤニヤと楽しげに眺めている。

大河：「まぁまぁ、理人も陽花里を疑うなよ。それより、さっきから一言も喋らない琴葉の方が怪しくないか？ 琴葉、さっき暗闇の中で誰かに何かされたんじゃないか？」

大河の声のトーンはいつも通り快活に見えたが、腕の組み方はどこか上品で違和感があった。大河の言葉に、琴葉は、ビクッと肩を跳ね上げた。琴葉は相変わらず自分のスカートの後ろを両手で力強く押さえたまま、唇を真っ白になるまで噛み締めている。その視線は、怯えたように泳ぎ、理人の顔と、大河の顔を交互に見ては、すぐに床へと戻された。

理人：「琴葉さん、無理に喋らなくていい。」

理人がそっと琴葉を庇うように前に出る。その行動は、いつも通りの「仲間を思いやる大人しい青年」そのものだった。だが、理人の背中を見つめる琴葉の瞳には、怯えとは違う、観察の光が宿り始めていた。

第４話：密室の接触（陽花里視点）

　これ以上ないほど張り詰めた空気の中、大河が大きく手を叩き、自らの逞しいカラダを誇示するように声を上げた。

大河：「このまま４人で睨み合っててもラチが明かないな。自家発電機がいつ完全に落ちちまうかも分かんない。誰か２人で廊下の奥にある書斎のブレーカーを確認しに行こうぜ…陽花里、俺と一緒に来るか？」

陽花里：「えっ…あ、うん！」

　陽花里は、すぐさま同意して立ち上がった。無言のままスカートを押さえて震えている琴葉と、それを庇う理人の間に漂う不気味な空気に、これ以上耐えられなかったのだ。

理人：「男２人で行った方が安全じゃないか？」

　理人が静かに制止をかける。

大河：「何言ってんだよ、琴葉をこんな怯えさせたまま男２人で離れる方が危ないだろ。な、さっさと行ってくるわ。」

　大河は、快活に笑い飛ばした。その流れるような拒絶の作法は完璧だったが、理人の背後に隠れる琴葉だけは、大河が放つ異様な気配を敏感に察知し、息を殺していた。

　結局、大河と陽花里が、広間の外へと向かうことになった。廊下に出ると、古い壁のブラケットライトの光はさらに弱く、二人の影を不気味に壁へと引き伸ばしていた。

大河：「陽花里、お前さっきの琴葉の態度、どう思った？ 妙に大人しかったよな。」

陽花里：「分かんない。でもなんか、みんなおかしいよ…早く電気直してよ」

　陽花里は、自らの腕を抱きしめ、大河の後ろを遅れないようにぴったりとついていく。やがて二人は、埃っぽい匂いが立ち込める書斎へと到着した。部屋の隅にある配電盤へ向かい、大河が錆びついた鉄の蓋をギギィと開ける。

大河：「レバーが焼き切れているな…」

　陽花里が不安げに配電盤を覗き込んだ、まさにその瞬間だった。背後に立っていた大河の足音が、ふっと不自然に途絶えた。

陽花里：「大河…？」

　陽花里が嫌な予感を覚えて振り返ろうとしたが、それよりも早く、大河の大きく逞しい手のひらが電光石火の速さで陽花里の腰へと伸びた。いつもの大河のガサツな動きとは一線を画す、恐ろしく滑らかで強引な手つき。大河の手は、陽花里のタイトなジーンズの上から、その無防備で肉厚なおしりを容赦なく、深く、鷲掴みにした。

第５話：魂の転移（陽花里視点）

陽花里：「ひゃっ…あッ！？大河があたしのカラダを狙ってたなんて…でも…大河になら……なに…この快感…今まで感じたことない…このままあたし、大河に入るんだよね…」

強烈な愛撫に陽花里の全身の血が沸騰した。衣服を限界まで無視して食い込む指先の硬さと、脳髄を直接灼くような快感が陽花里の背骨を駆け抜けた。薄暗い密室の中、ゾッとするほど冷酷な表情の大河…その表情は、やがて目の前にいる女に転移することになる…

陽花里：「あっ…ああぁッ…！」

陽花里のカラダが激しく弓なりに反り、強烈な快感の濁流に呑み込まれ、その場に崩れ落ちた。大河の手がおしりを掴んだ瞬間、指先から衣服を伝って、脳髄の奥深くへ電流を流し込まれたような衝撃が走った。相手を「感じさせる」ことでカラダを奪う、呪いの愛撫。その瞬間、大河の逞しいカラダから、目に見えない半透明の「悍ましい影」が陽花里の背中へと滑り込むように吸い込まれていった。

と同時に、陽花里の魂が、押し出されるようにして勢いよく外へと弾き出された。

陽花里：（大河！あたしのカラダに入ったんだね…ならあたしも大河のカラダに…！？」

しかし、宙に弾き出された陽花里の魂は、大河のカラダに乗り移れなかった。

陽花里：（どうして？？彼女のあたしがどうして大河のカラダに乗り移れないのよ！！）

弾き出された陽花里の魂は、見えない強力な引力に引っぱられるようにして、廊下の奥―広間に残された異性のカラダへと強制的に引き寄せられていった。

陽花里：（理人…ごめん…あなたのカラダ…借りるね！必ずいつかは返す…から…）

キィィィン……と鼓膜を刺すような高周波の音が、理人の脳内で響き渡る。

理人：「…っ、うっ、あっ！ああ…な、なに…これ…っ！？」

広間の暖炉のそばで琴葉を庇うように立っていた理人のカラダが、突然激しく咳き込みながらその場に膝をついた。理人のカラダに滑り込んだ陽花里の魂は、急激な視界の上昇と、今は自分のモノとなった男の指先を見つめて震えた。

琴葉：「…どうしたの？理人…くん…」

理人（中身陽花里）：「何でもないよ…琴葉…ちゃん。」

陽花里は、声に出したかったが、「バレると魂が消滅する！」という魔女の言葉を思い出し、必死でこらえ状況を理解しようとしていた。

一方、書斎の薄暗い配電盤の前。床に膝をついた状態から、ゆっくりと立ち上がった陽花里（中身大河？）は、不敵に唇を歪め、その指先を愛おしそうに眺めていた。その様子は、本来の陽花里とは似ても似つかなかった…

第６話：一人称の罠（陽花里視点）

書斎での悍ましい「魂の転移」を終え、陽花里（中身大河？）が、静まり返った広間へと戻ってきた。広間では、先ほど膝をついたばかりの理人（中身陽花里）が、自分の男物のスラックスを不自然に気にしながら、ぎこちない足取りで立ち上がろうとしていた。その傍らでは、琴葉が床を見つめたまま立ち尽くしている。

理人（中身陽花里）：「大河は、どうしたんだ？陽花里？」

理人（中身陽花里）は、パニックになりそうな心を必死に抑え、理人のフリをして問いかけた。陽花里（中身大河？）は、淀みなく答えた。

陽花里（中身大河？）：「トイレに行って来るって…」

明らかに不自然な行動…しかし理人（中身陽花里）は、目の前にいる自分のカラダには別人、大河が乗り移っていると知っている。そのことがバレると大河の魂は、消滅する。それどころか、陽花里の魂が誰かに乗り移っていることも確定的に気づかれてしまう。だから追求することはできなかった。陽花里は、派手な爪を弄りながら、フッと鼻で笑う。

陽花里（中身大河？）：「何もおかしなことはなかったわよ。」

その時、理人（中身陽花里）が小さく息を呑んだ。陽花里が口にした「あたしたち」という一人称。フッと鼻で笑う仕草は、奔放なギャルである陽花里の癖そのものだった。

陽花里：（大河…あたしを真似してくれてるの…！？）

理人（中身陽花里）は、自分のカラダに乗り移っているだろう大河の配慮に感謝し、男のカラダに慣れないまま必死に理人らしく喋ろうと言葉を重ねた。

理人（中身陽花里）：「そう…それなら良かった…」

理人（中身陽花里）は、普段の理人とは異なり、情緒的な雰囲気を醸し出していた。しかし、陽花里（中身大河？）はもちろん、琴葉もその違和感に突っ込むことはなかった。

暖炉の火がパチパチと爆ぜる音だけが広間に響いていた。互いの些細な仕草の違和感に気づきながらも、４人はそれを決定的な証拠として突きつけることができない。なぜなら、下手に他人の正体を暴こうとすれば、自分の推理のプロセス自体が「本来の持ち主なら知り得ない事実」を孕み、自らの正体を露呈させる諸刃の剣になりかねないからだ。

ソファでゆったりと腰掛ける陽花里（中身大河？）は、その様子を冷ややかに眺めていた。一方、その横では琴葉が、いつものように大人しく座り、目の前の理人（中身陽花里）を凝視していた。琴葉の視線が、じっと理人の背中へと注がれる。やがて琴葉は、じわじわと理人の背後へと回り込んでいった。

第７話：背後の誘惑（陽花里視点）

琴葉：「理人くん…私、怖い…」

怯えながら、琴葉の華奢な手が、ゆっくりと理人の腰のあたりへと伸びていく。しかし、その怪しい接近を、ソファに座った陽花里（中身大河？）の瞳が見逃さなかった。

陽花里（中身大河？）：「ねえ、琴葉。さっきから、なんでそんなに理人の後ろばかり気にしてるわけ？」

陽花里（中身大河？）の鋭い声が広間に突き刺さり、琴葉の手がピタリと止まる。

琴葉：「…何でもない。理人くんが寒そうだったから…」

琴葉は、必死に声を震わせて返す。だが、その背中には冷や汗が流れていた。琴葉の言葉を冷ややかに聞き流しながら、陽花里（中身大河？）は、琴葉から目を離さなかった。そしてトイレから一向に戻って来ない大河を心配して、３人は大河を探しに館の中を歩き回ることにした。すると、廊下に座り込む大河を発見した。

陽花里（中身大河？）：「体調が悪そう、それなら、あたしが大河を看てあげるわよ。」

すかさず陽花里（中身大河？）はしなやかな動作でソファから立ち上がると、大河へと歩み寄った。陽花里（中身大河？）の派手な衣装が擦れる音が、妙に大きく室内に響く。

陽花里（中身大河？）：「ちょっと、大河？大丈夫？」

覗き込むようにして、陽花里（中身大河？）は大河の肩に手を置き、そして次の瞬間、大河の背後へと滑り込むようにカラダを密着させた。陽花里の細い指先が、大河のスラックスの上から、その引き締まったおしりを躊躇なく、深く揉みしだいたように見えた。

陽花里（中身大河？）：「…あら？」

陽花里（中身大河？）が小さく眉をひそめ、おしりを掴んでいた手を離した。理人（中身陽花里）は、目の前で起きた２人の様子を驚愕の目で見つめていた。

理人（中身陽花里）からすると、陽花里（中身大河？）がせっかく手に入れた陽花里のカラダから元の自分のカラダに戻る理由がわからない。もし、今ので元のカラダに戻ったとしたら、元の陽花里のカラダには誰が入ったか、ということになる…

そしてあることに気づいた。自分が理人のカラダを奪ったということは、理人の魂が元の自分の、陽花里のカラダに今入ったのではないかということに…理人の魂は、男だ…大河のカラダに入ることはできない。ずっと、女のカラダを狙っていて、大河が元のカラダに戻ったタイミングで陽花里のカラダに乗り移ったと考えれば、説明がつく。一方の琴葉は、何を考えているかわからないような静かな笑みを浮かべていた。